

荻生徂徠から中根元圭へ宛てた4通の書簡について

On Four Letters from Ogyū Sorai to Nakane Genkei

小林 龍彦

Tatsuhiko Kobayashi*

Abstract

Four letters from Confucian Ogyū Sorai (1666 -1728) to calendrical calculator Nakane Genkei (1662 - 1733) have been preserved in the Kansai University Library. In each of these letters, the date and month are only written, but not the year.

Although it is not clear when the two met, it is likely that the letters were written between the 10th and 12th year of Kyōhō period (1725 - 1727). The main content of the letter is related to the request for a preface to Genkei's work, the *Kowa-tsūreki* (the Japanese Emperor's Almanac) and the Chinese literature, the *Jun shi* that Genkei planned to publish. The letter also mentions that the two had a disagreement over the evaluation of the *Gakuritsu zensho* (the Complete Works of Chinese classical Music and Calendrer) written by Zhū zǎi yù (1536 - 1611), which was introduced to Japan from China in July of 10th year of Kyōhō period (1725).

In this paper, we will first introduce the contents of the letter, converted into modern printing, as well as the process of writing the preface for the two books and the conflicts between the two sides regarding the value of π discovered by Zhū zǎi yù.

§1. はじめに

この小論で触れようとする荻生徂徠(1666 -1728)から中根元圭(1662~1733)に宛てた4通の書簡は、関西大学図書館泊園文庫が収蔵する儒者藤澤東咳(1795~1865)¹の自筆稿本『東咳文稿』(請求記号LH2*甲**10)に収まるものである²。

Received March 15, 2021. Revised May 10, 2021.

2020 Mathematics Subject Classification(s): 01A45

Key Words: History of Japanese Mathematics, Ogyū Sorai, Nakane Genkei, *Kōwa-tsūreki*, *Jun shi*, *Gakuritsu zensho*.

This work was supported by the Research Institute for Mathematical Science, an International Joint Usage / Research Center located in Kyoto University.

*Professor Emeritus of Maebashi Institute of Technology, Japan.

email: t.kobayashi1635@nifty.com

¹ 讃岐生まれ。名は甫(はじめ)、字は元発、通称は昇蔵、別号は泊園。大坂に泊園書院を設立。徂徠学の中興とされる。

² 徂徠から元圭に宛てた書簡は早稲田大学図書館古典籍総合データベースの「荻生徂徠書簡」(チ06_03890_0062_0011)にも1通収蔵されるが、これの検討は後日を期す。

藤澤東暎は讃岐の生まれで、大坂に泊園書院を創設し、徂徠学の普及に努め学派の中興と称される儒者である。東暎は、また、徂徠が嗜んだ七絃琴の名手でもあった³。そのような東暎が筆録した書簡は東アジア音楽史の研究者である山寺美紀子氏によって調査発見されたことを契機に、荻生徂徠の研究史にあって未確認の史料として俄かに脚光を浴びることになった。山寺氏は「荻生徂徠の音楽に関する新出資料五点とその意義について：享保五年に有馬兵庫頭の問いに答えた書、「三五要略考」及び音楽に関する覚書、琴（七絃琴）に関する文書、吉水院旧蔵楽書に関する文書、中根元圭に宛てた書簡」とする論考において書簡の一部を翻刻したうえで、書簡全体を影印として公表するに及んだ⁴。筆者も同氏の論考に基づいて「朱載堉の円周率と荻生徂徠」と題する小論を発表したことがある⁵。だが、筆者の議論は本稿第3節で示す「(一)八月十五日付書簡」に依拠し、しかも朱載堉の円周率の研究に限定しての論究であったことから、荻生徂徠と中根元圭との関係性や元圭の著作である『皇和通曆』に寄せた徂徠の序文のこと、さらには元圭が出版を企図した『荀子』とそれに寄せた徂徠の序文及び本文の校合などについて論じることができなかった。

今回、山寺氏のご厚意と協力のもとに、4通の書簡の現代活字化を試みることにした。その目的は、言うまでもなく、先の小論が残した課題を解決することにある。しかし、書簡の現代活字化は筆者の力量不足から誤読や未読箇所を含む不完全なものに終わっている。だが、そうした未完の活字化でありながらも、書簡からは徂徠と元圭の関係性だけでなく、八代将軍徳川吉宗（1684～1751）に近侍していた暦算学者建部賢弘（1664～1739）の動静も窺うことができたことは成果の一つになろう。それはまた、賢弘の暦算学に対する徂徠の視線と言うこともできる。

§2. 徂徠書簡の概要

現代活字文の紹介に先立って、書簡に関わる書誌的状況と徂徠が書簡の中で話題にする歴史的事項を概括的に触れておこう。

まず、既述のように4通の書簡はいずれも荻生徂徠が中根元圭に宛てたものである。そのような書簡が徂徠学を継承する藤澤東暎によって筆録され泊園文庫として収まった。東暎は書簡の出所を明らかにしていないが、徂徠の手控えなどを目にする機会があって記録に及んだものと思われる。

さて、この小論では書簡の冒頭に（一）-（四）の漢数詞による番号を付したが、いずれの書簡も文末に月日が書かれるだけで、年紀・年号・干支などは記されていない。しかし、書簡の精読から、享保10年（1725）前後に始まり徂徠が没する享保13年（1728）1月までに差し出されたものであることは確実となる。そして（一）-（四）とする通し番号は東暎の手稿に綴じられる書簡の順

³ このことについては山寺美紀子「藤澤東暎と七絃の琴-その琴系及び弾琴、琴学、琴事の実像について」（関西大学東西学術研究所紀要、第49輯、2016年）を参照されたい。

⁴ 山寺美紀子「荻生徂徠の音楽に関する新出資料五点とその意義について：享保五年に有馬兵庫頭の問いに答えた書、「三五要略考」及び音楽に関する覚書、琴（七絃琴）に関する文書、吉水院旧蔵楽書に関する文書、中根元圭に宛てた書簡」、関西大学東西学術研究所紀要、第51巻、2018年、pp.111-143.

⁵ 武内恵美子編『近世日本の楽と諸相』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告12、2019年、pp.143-162.

番に従っているが、書面からはそれらが時系列的に綴じられたものでないことも明らかとなる。

書簡の内容について簡単に触れておこう。まず、書簡の中心的な話題は、中根元圭が正徳4年(1714)に既刊した『皇和通暦』に寄稿する徂徠の序文とその内容、さらには元圭が版行を企図した『荀子』の徂徠による本文の校合と序文の執筆となる。勿論、それらに関連して漢学研究のことも組上に載る。そうした文面からは、徂徠が差し出した書簡の間に、当然のことながら元圭も様々な質問を徂徠に発していたこともわかってくる。元圭の書状には『皇和通暦』と『荀子』の序文の催促は勿論のこと、享保10年7月に徂徠が幕府から命じられた『楽律全書』の校閲に関することも含まれていた。特に『楽律全書』の著者朱載堉(1536-1611)による律暦と度量衡の研究に関して、徂徠は朱載堉が発見した円周率の値を金元代の算学者李冶(1192~1279)が見出したものであると断言して譲ることはかった。元圭から徂徠に宛てた書簡が未発見である現在、朱載堉の円周率に関して元圭がどのように反駁したかは分からない。しかし、元圭は徂徠の主張を「虚誕」とする強い言説をもって非難したのであった。「虚誕」はうそ、偽りを表す言葉であるから、元圭の指摘は大儒徂徠の見解を全面から否定する辛辣なものであったように思える。また、『楽律全書』の校閲と円周率の評価にあつては建部賢弘も関与していた。賢弘は徂徠が唱える李冶説に元圭と同様に異論を発していたのである。

円周率の問題や数学観を巡る見解とは別に、徂徠が江戸幕府の中枢に元圭を積極的に売り込んでいた事実も浮かび上がってくる。宣伝活動の成果であろうか、徂徠の書簡は数年のうちに元圭の江戸出府があり得るとも記しているのである。また、徂徠による売り込み活動は頻繁に行われていたようで、幕閣への度重なる吹聴は「聒耳」のように映るとする懸念も吐露している。

中根元圭の江戸出府は、源元寛が明和6年(1769)6月に著した『三正俗解』の跋文によれば「享保辛丑、明府召、見、応対、称旨」とあった。「享保辛丑」は享保6年(1721)にあたる。元圭と建部賢弘との交流はそれ以前に始まっていたであろうが、建部の記録では、享保5年(1720)に『黄赤道立成』を元圭に授けたとすることが初出となる⁶。以後両者は親交を深め、享保13年頃に元圭は建部賢弘門人と称するほどになった⁷。こうした建部との出会いや徂徠による幕府要人への工作が奏功して、元圭は享保12年4月に「十人扶持」のお抱えとなり、享保13年夏には江戸出府による『暦算全書』の訓点和訳を仰せ付かることになった。

因みに享保10年は、荻生徂徠60歳、中根元圭64歳、建部賢弘62歳にあたる。

§3. 書簡の現代活字文とそれらの解説および注釈

以下に書簡を現代活字文にして紹介するが、併せてそれら書簡のなかで注目すべき徂徠の発言について若干の解説を加えることにした。このことは中根元圭が徂徠の書簡に対してどのような返書を送っていたかを推測する史料となり、また、徂徠の書簡が差し出された年紀を推量する鍵になると考えるからである。なお、書簡の現代活字化はつぎの凡例に従う。

凡例

⁶ 小林龍彦「中根元圭と禁書令の緩和」、『和算研究所紀要』No.16、2018年、pp.8-11 参照。

⁷ 中根元圭が享保13年5月に刪定した『累約術』は「東都建部先生著 門人平璋元圭」と表している。

- 一 4通の書簡の見出しに付けられる(一)-(四)の漢数詞は、藤澤東暎の自筆稿本『東暎文稿』に収録される中根元圭宛書簡の綴じられた順序を表している。
- 一 現代活字文にあつて□は未読文字になる。
- 一 原文にあつて片仮名書きの文字は平仮名書きに直したが、原文のまま片仮名書きを尊重した箇所もある。
- 一 旧漢字の「圓」は「円」、異体字の「乚」は「こと」、「之」は読みを除いて「の」に直した。
- 一 現代活字文中の句読点は筆者が適宜与えたものである。()書きは筆者による補字、/は原文の改行を表している。

(一) 八月十五日付書簡

一別已後御左右も不承御遠[□]敷存候。秋暑殊甚[□]敷御座候。愈御無異御座候や。御面別の時分御不快の様承候。一路御平安に候哉。存候此間岡西/扨にて致承知候得共、御平安の由、弥望存候。愚拙無事罷有候。小屋懸も出来、六月廿七日旧宅へ移申候。乍慮、外御心安思召可被下候。

一 此間長崎へ参候清人朱来章と申す者献候由にて⁸、/明万曆年中鄭恭王世子朱載堉編述の書十五部⁹吟味被仰付、致一覽候。此三部は聖壽万年曆、/同備考、律曆通記(融通)にて候。授時曆、大統曆誤有之候由、/別に曆法組立申し候。大統曆は私習、天文の律條/曆法藏于官府有之候故、載堉終に一見不申なり。見/行之曆を以而推知候由に候。其外、舞楽学書七、八部、律呂精義内外篇、樂經古文、律学新説、樂/学新説、算学新説、合て十五部なり。律呂精義/の内、十二律の算法有之。大形、足下の説と同様¹⁰/存候。但、半律音蜀は空圍の度不得法故なりとて、/三分損益を廢して、別に算法を立て候。空圍の度/も自然の度有之由に候。此段足下異に候。此外に/円算の事有之候。祖冲之が密率は非密率なり。/約率なり。別に密率あり¹¹。周髀算經、周礼臯人に有/之、千古の人發明不得候を、元儒李治これを会/得して測円海鏡の序中に書候。人に不存事故、/詳に説由有之候。曆学、数学は拙者不案内に候へ共、/書面の通り如右に御座候。曆学、数学達者に仰/付候はば、御調法にも可能成候由申上候。其次に足下の/御尊をも申候。中に届申間敷と存候。右の御書物/吟味手間取、いまだ御頼の序も不認候。右の十二/律と円法と御嗜好の事に候故、粗増別紙懸/御目候。以上。

八月十五日 荻生惣右衛門 茂卿
中根上右衛門 様

⁸ 明の商人であつた朱来章の再来日は享保10年2月5日と記録される。この時、同船にて来日した朱佩章が『楽律全書』を幕府に献上した。

⁹ 万曆35年(1607)刊行の『楽律全書』を指す。

¹⁰ 元圭による十二平均律の研究は、元禄5年(1692)刊行の『律原發揮』の「上下相生論」に見えるが、元圭は五分を半律とし、これを「一十一乗ノ法(12乗の法)に開」けば「一律ノ衰法」を得ると述べている。

¹¹ 朱世傑の『算学啓蒙』の「算学啓蒙総括」では「冲之が密率(冲之姓は祖、乃し宋南徐州の從事史、この密率を立て、亦た円の微を究むなり)、周二十二尺、径七尺」と記していた。建部賢弘は元禄3年(1690)に『算学啓蒙詳解大成』を刊行して、朱世傑の原文に「径一尺にして周三尺一寸四分二厘八毛五七余なり。祖冲之、この法を立て、亦た円の不尽を合すとなり。密率とは正^{ただし}く合法と云ふ意なり、密合、密近などと云へり」とする補注を加えるが、「周二十二尺、径七尺」が密率であるとは断言していない。

「解説」

書簡(一)の冒頭は「一別已後」と記し、「御面別の時分御不快の様承候」として元圭の健康状態を気遣う様子は、この書簡が元圭に送付される以前に彼らの面識があったことを窺わせている。こまた文面から、この時期元圭は「不快」のように見えて健康状態が芳しくなかった様に読める。

阿波の暦学者源元寛が明和6年(1769)6月に刊行した『三正俗解』の跋文には、元圭は「享保辛丑、明府召、見、応対、称旨」したと誌している。「享保辛丑」則ち享保6年(1721)、元圭が江戸に出府し将軍徳川吉宗の下問に應えていた頃、元圭は徂徠と接触したのかも知れない。現代活字文の3行目で触れる「小屋懸も出来、六月廿七日旧宅へ移申候」とする一件は、徂徠の自宅が火災に遭ったことと関係しているのであろう。享保10年2月、徂徠宅は火事に遭い、以後半年ほど「季氏湫隘之宅」で過ごした後、自邸に戻ったとされる¹²。徂徠の書簡では、それが6月27日のことで、しかも「旧宅」へ移ったと知らせている。

そうした徂徠の事情は兎も角として、徂徠宅が被災したことを知った元圭は見舞い状を送ったのであろう。それは享保10年2月の火災以後のことになる。

上記の身辺報告に続いて、一項ではこの書簡の中心的話題ともなる朱載堦の『楽律全書』に表れる十二平均律と三分損益法及び祖冲之と李冶の円周率が徂徠に載る¹³。だが、徂徠が論拠とした李冶の『測円海鏡』の舶載が享保11年(1726)であったことは注意を要する。言うまでもなく、徂徠が『楽律全書』の吟味を命じられたのは享保10年7月8日ことであった。しかし、古人の円周率の発見に関連して「元儒李冶これを会得して測円海鏡の序中に書候」とする主張は、『測円海鏡』が享保11年以前の日本に伝わっていたことが確認できない現下にあつては、ここでの徂徠の発言は享保11年以後と言わざるを得なくなる¹⁴。

加えて注目すべきは、一項の文末で「其次に足下の御嚮をも申候。中に届申間敷と存候。右の御書物吟味手間取、いまだ御頼の序も不認候」と記すことであろう。「足下」とは元圭に外ならない。つまり、この書簡が認められている時期、徂徠は幕府の要人に元圭の「嚮」をして、人柄や暦算学者・漢学者としての能力を吹聴していたのである。しかし、そのような話が政権の中枢になかなか伝わらないことも懸念している。嚮話の相手が誰であるのか興味深いところである。その上で、徂徠は「いまだ御頼の序も不認候」と詫げる。ここでの「序」が『皇和通暦』と『荀子』のどちらを指すのか判然としないが、いずれにしてもこの書簡が書かれる以前に元圭は序文の執筆を依頼していたことになる。すると、元圭からの火災見舞いには序文の督促も含まれていたことになろう。序文が遅れている理由を徂徠は『楽律全書』の吟味に手間取っているためと釈明した。

また、「右の御書物」とは『楽律全書』のことになる。徂徠はこれを「合て十五部」と言うが、全体では48冊54巻の大部な書物であった。その内の「十二律と円法」は元圭が嗜好する分野であるから「粗増別紙懸御目候」と述べて、元圭にそのあらましを別紙にして送ることを約定している。別紙の要約文を手にした元圭から、徂徠宛てに徂徠の見解に対する批判文が届い

¹² 平石直昭『荻生徂徠年譜考』、平凡社、1984年、pp.148-149.

¹³ 小林龍彦「朱載堦の円周率と荻生徂徠」、武内恵美子編『近世日本の楽と諸相』（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告12）所収論文、2019年、pp.143-162.

¹⁴ 『測円海鏡』の舶載及び徂徠の近世算学批判に対する和算家の反論については拙著「荻生徂徠の数理観とその影響——再び李冶と朱載堦の円周率から——」を以て再論（投稿原稿）した。

たのである。これが書簡(三)に見える徂徠の反論になろう。

(二)五月望付書簡

- 一 能所のこと古書には韓非子に有之候。仏書の能所に/相似候。玉篇の能所は父字母字のことにて可有之候。
- 一 九弄反紐のことは元来音の訛転を推す術なり。梵/音を学び候に入用の事と相見へ申し候。中国の反切には曾て/入用無き事なり。既に用処なければ名の付け様も不及論歟。
- 一 笑痒と申す字覚不申候。大形は杜撰の様にも存候。コリ/グルと云う事見当り不申候。
- 一 通暦序、荀子序認進申候。荀子校合不得暇候故、/取懸りも不仕候。則、御本致返進候。
- 一 足下御事、畢竟は被差出候積りと相聞へ候。二、三年/中には御出府可被成候。此度の儀は本豫侯¹⁵、殊の外の推/挙にて候。此人好義愛才こと天性にて、建部¹⁶も此度は御/挨拶能致候。乍去、建部代りと計思召趣に相聞申候。/朝廷の衆中人の年齢を不知。扱々不解事情ことに候。只々/能々御保養被成御息災に御入候。慎に祝入候。別人を御/取立にて術を続候。人出来候事朝廷の思召に合可申候。万里/の地を隔て、万の物いふ計にていやとじれず候。恐々謹言。

五月望 茂卿

中根上右衛門 様

「解説」

書簡(二)の一項から三項は漢字の語義に関する徂徠の返答になっている。一項では「能所」のこと、二項では「九弄反紐」のこと、三項では「笑痒」と「コリグル」のことを話題にしている。徂徠が、例えば三項では、「覚不申候」とか「見当り不申候」と記しているから、いずれも元圭の質問に応えたものになろう。

四項に言う「通暦序」と「荀子序」とは、徂徠が『皇和通暦』と『荀子』のために起稿している序文のことを指している。徂徠はそれらの執筆が進んでいると報告したうえで、『荀子』の本文の校合は「暇を得ることができず、取り懸かれないから、御本を返進する」と断り、校正本を返却すると通告している。

中根元圭の『皇和通暦』は、初版として正徳4年(1714)10月に「白山蔵版」が公刊されていた。この事実に従えば、元圭からの序文の依頼が正徳4年版のためであれば、書簡は正徳4年以前のものになろう。だが、正徳4年版の『皇和通暦』に徂徠の序文は掲載されていない¹⁷。他方として、徂徠の序文を有する『皇和通暦』では、序文は「享保乙巳冬十月朔」の年紀を以て認められたことになっている。干支は享保10年(1725)にあたるから、序文の原稿は享保10年10月1日以後元圭に渡されたことになろう。勿論、日付以前に序文を元圭に渡した可能性もあるが、

¹⁵ 本多忠統は宝永4年(1707)から同6年まで、五代將軍徳川綱吉の小姓を努めた。享保4年(1719)には大番頭、享保9年には奏者番、享保10年6月11日に若年寄に抜擢された。

¹⁶ 書簡が享保10年のものとすれば、建部賢弘はこの時期、二丸御留守居の役職に在りながら「日本国総図」(「享保国総図」)の完成に腐心していた。そして、同年9月16日には「国総図御用久く出精」の評価を得て「金五枚、時服三」を拝受するに及ぶ。詳しくは小林龍彦「三人の徳川將軍に仕えた暦算家建部賢弘」(『和算研究所紀要』、No.15、2015年)を参照されたい。

¹⁷ 例えば、東北大学附属図書館岡本文庫蔵：岡本刊94を見よ。また、左記の版では元圭による「皇和通暦叙」は宝永3年(1706)3月に誌されていることから、この暦書の刊行は早くから準備されていたことが窺える。

どちらの場合であっても書簡そのものは原稿が完成していない享保10年10月1日以前の状況を表していることになる。この指摘は、徂徠が『荀子』のために誌した「刻荀子跋」の年紀が享保10年10月望(15日か)であることも証左になる¹⁸。

このように一項から四項までは、元圭の質問に対する徂徠の応答になっている。そして五項は一変して、徂徠による江戸幕府への元圭の売り込み工作の様子を伝える文面となる。冒頭の「足下御事」とは、言うまでもなく中根元圭のことである。その元圭を、最終的には江戸に出府させる腹積りであると「相聞申候」と伝え、それが「二、三年」の内に実現するかも知れないとも教えている。そのような高度な人事情報を徂徠に漏らしたのが、その後の文面に現れる「本豫侯」こと本多忠統(1691 - 1757)であったのであろう。『徳川実紀』の享保10年6月11日の条には「奏者番兼寺社奉行本多伊豫守忠統少老にうつり、奏者番小出信濃守英貞寺社奉行をかね¹⁹」とある。少老は若年寄の異称で老中につぐ重職になる。そのような本多は吉宗治世下にあつて幕政改革に尽力した一人でもあつた。加えて、本多が徂徠の弟子でもあつたことも注意して置かなければならない。そして、そのような立場にある本多が「殊の外の推挙」したと述べることは、元圭の才能を認めて吉宗に謁見させようとする動きがあつたこと示唆している。それは「建部代りと計思召趣に相聞申候」とも言う。「建部」とは当時、徳川吉宗の信任を得て奉仕していた建部賢弘のことである。その建部の「代り」と言うのであるから、代役としての任務が元圭に与えられようとしたと解釈することができる。それがどのような任務であつたかは定かでないが、吉宗の暦算学研究の顧問役であつたかも知れない。

(三)極月十五日付書簡

当の認直し遣候由、本書に申候へ共被遣候。下書にせい字の処朱丸付進候。是にて埒明可申候。冤字のこと/被仰下候。無罪而得罪也。

芳酬拝見□□堅固弥望存候。愚拙無別条能在候。/痢疾²⁰快以後御内用取懸り、不得寸隙、漸四五/日以前相済申候。被仰越候序文本書別書相違候/由、病後忙裡相認候故、誤錯有之候。別書の方能く/御座候。但、せい字の処のべかきに仕候間、認直し遣可申候。/是にて板行之間にい合可申候。諳習春に成認可進/候。

一 李治算法の事申遣候処、虚誕の説の事御申越候。/とくと御覧にての儀に候哉。無心元存候。右申遣候朱/来章献上の書物、暦術、円法の事、万一御調法にも成/可申候哉。暦術、算法、鍛錬の仁へも被仰付吟味被遊/可然の由申候。其節足下事も申上候。其後承候へば、建ア²¹御/番引被申候由。定て右の考も仰付候と相見へ申候。暦/術、算術は建ア鍛錬に可有之候へ共、右の書籍の全/体取扱成申候哉。無心元存候。若書籍文言上に指/支も候はば、又々此方へ可申参候。其節又々足下御尊可/申存候へ共、只、取成し計申ては最眞の様に相聞へ候。/依之右の円法、律算の事も申し遣し、足下御料簡/をも承置候はば、上への御挨拶いたし様も可有之と存候/ての事にて御座候。右の円法、虚誕と御申越候。定て建ア

¹⁸ 物茂卿『徂徠集』巻之十八(早稲田大学図書館古典籍総合データベース蔵、請求記号イ 17_00725_0001)の14丁表 - 15丁裏を見よ。

¹⁹ 『新訂増補国史大系 徳川実紀』第八篇、吉川弘文館、平成3年、p.373。なお、本多は宝永4年(1707)から同6年まで五代將軍徳川綱吉の小姓にいて、享保4年(1719)大番頭、享保9年奏者番などを勤めるなど吉宗の享保の改革に尽力した一人である。

²⁰ 下痢、腹下しの病。

²¹ 「建ア」の「ア」は部の略字であり、ここでは建部賢弘を指す。

- /も左様可申候哉。左候得て、建アにて事識、足下へ可及/様も無之候。算学の事は愚拙不案内に候へ共、虚誕と御申越の所落着不申候故、再申遣候。御了/簡とくと可被仰下候。
- 一 祖冲之の密率径七尺、則、周二十二尺。/今、李冶が法にて布算いたし見申候所、二十一尺九寸九/分八厘八毛七糸七忽余に成申候歟²²。然れば径七尺にて/周一厘一毛余の違に候。此一厘一毛余短候所、虚誕に候哉。是は何として虚誕とは定め可申候哉。此段無/心元存候。事の上にて量候はば、径七尺の丸き物を正円にいたし/候事は成可申候へ共、僅二毛違は目も及申間敷候。径/七丈の物を丸く拵候へば、一分余違候て、目も及可申候へ共も、径七丈の円物を拵はかるべき様、わざの上にてはいたし方も有間敷候。然れば、わざの上にて虚誕と可定様有之間敷/候。理の上にて虚誕の御定かと相見へ申候。如何様の/道理にて虚誕に成候哉。此段承度存候。
- 一 円法、祖冲之の密率を守るときは祖冲之が口先を/守る計にて候。本拠無之候。李冶が説は周礼臬人と周/髀算經の文を拠にして、本拠有之候。周礼臬人の嘉量/制度内方尺にて、其外を円にすと云文を古来の注家/は嘉量の形方一尺なり、只、形計を外を円くすると見/たるなり。此説やくたいもなきこと也。李冶が説は周髀/算經に本づきて、元来、円算の古法円内に方を容/るゝことなるゆへ、周礼の文、算法を以てかきたるものなり。内方/尺と云は、假設たる詞にて、内に方一尺容るゝほどに円くすると/云こと也と見たるなり。然れば、内方尺と云たるにて、外円の寸/尺は云に及ばず知るゝこと也。如此見るときは周礼の文より/済む也。祖冲之が述作の書綴術五卷歟。唐六典/にも有之候。倭令にも有之候へ共、今世に伝り不申候。只、算/学啓蒙計を見て祖冲之の術は是れと難定候。/愚按は、祖冲之が本術も李冶と一般に可有之候。算/学啓蒙に有之候はば、密率と云ながら略術にては無之候哉/と存事に候。いかにしても李冶の説は本拠正く候間、円算/の古法と相見へ申候。且又、律算の事は御同心に/被仰越候。此段も承知難致候。足下先年被仰候/律算の事は管圍の説を廢する故、半律にては聲める/事に候。朱載堉も其段委細に弁申候。管圍と管の/長さ相応にするときは、半律も聲、正律と同じと申候。管圍の/率を知ざるゆへ半律にて聲めると云事を説申候。扱、其律/管の長さ相応に管圍をすると云かね合は、円中容方、方/中容円、又、其円中に方を容れては、又、円を容れて見るときは、/自然の圍数生すると云事なり。然れば朱載堉が律/算は全く円算と表裡を別法に非ず。律算迄を/究め尽さざるときは、円法の蘊奥埒明兼候由歟。是朱/載堉が書面の趣如此候。然れども算法の事は拙/者不案内に候故、強て論不申候。且又、律圍を廢/する説は愚拙は不同心にて、絃を以て論するときは、長/短に随て律の替りあれども、簧の厚薄大小に随て替あり。此理/を以て見るときは、決定して律管の長短相応の管圍あ/るべきことと存候。右足下思召をとくと承置、/上への御挨拶致候心得の為申進候。心事応後音/候。恐謹頓首。

極月十五日 物部 茂卿

中根上右衛門様

「解説」

書簡(三)は、その前段で「下書にせい字の処朱丸付進候」と報告し、「仰せ越され候序文、本書別書相違候由」と伝えることから、『皇和通曆』か『荀子』の版行に向けての序文の校正が

²² 祖徠の言う「李冶の法」とは円周率を $40/9\sqrt{2}$ として用いることである。従って直径を7尺とすれば、口径は 21.99887763...となる。この円周率は朱載堉が見いだしたものであり、その算出法は『樂律全書』で明らかにされている。この議論に関しては注12および13の文献を参照されたい。

進んでいることを示唆している。書簡(二)によれば、徂徠は『荀子』の本文の校合を手放していた。確かに徂徠は『荀子』の跋文を書き上げたが、ここでのやり取りは『皇和通曆』の序文を指しているのであろう。『皇和通曆』の序文の年紀は享保10年10月1日であった。すると書簡は、これ以後の校正で生じた問題を論じていることになる。加えて、この書簡が認められた頃、徂徠は「痢疾」(下痢)に罹り病床にあったことも明らかになる。そのような苦境下の徂徠に対して、元圭は本書と別書で序文が違っていると指摘したのであろうが、徂徠は病氣回復後の忙しい時期に書き上げたため誤錯があると釈明した上で、別書の方の序文がよいとする判断を下している。こうした選択的判断から徂徠は二通の序文を元圭に渡していたことが分かる。しかし、この時の擦り合わせによって序文の字句の校正がすべて終わった訳ではなく、「せい字の処のべかきに仕候間、認直し遣可申候」と要請し、修正文章の返送を求めるに及んでいる。

上記の議論に続く第二項以降は、「李冶の算法」と朱載堉の『楽律全書』に記載される楽律と円周率の数値に集中する。まず、二項の冒頭、「李冶算法の事申遣候処、虚誕の説の事御申越候。とくと御覧にての儀に候哉。無心元存候」とする反論を示し、元圭の反応に対する拒否感が吐露される。こうした感情の起こりは、この書簡以前に徂徠が「李冶の算法」を元圭に語ったことに起因している。書簡(一)にあって、徂徠は「周髀算経、周礼卓人に有之、千古の人發明不得候を、元儒李冶これを会得して測円海鏡の序中に書候」と触れ、かつ『楽律全書』の十二律と円法について別紙にして元圭に知らせると伝えていた。徂徠からの別紙を読んだ元圭は、徂徠の李冶説に対して「虚誕」とする強い表現をもって批判するに及んだのであった。「虚誕」と難じられた徂徠は「とくと御覧にての儀に候哉」と反目するが、何を覧たかについては触れてはいない。しかし、書簡(一)の内容から見て、李冶の『測円海鏡』もしくは朱載堉の『楽律全書』を指していることは間違いないであろう。その上で、「右申遣候朱来章献上の書物、曆術、円法の事、万一御調法にも成可申候哉」と述べ、享保10年明の商人の朱来章が江戸幕府に献上した『楽律全書』に含まれる曆術と円法(円周率の問題)の吟味のことに話題を切り替えている。その文頭で、徂徠は『楽律全書』の曆算学のことは御調法になる可能性があると言い、曆術と円法を調べるのであれば曆算学に通じた専門家に吟味を仰せつけるべきであり、適任者として元圭を推薦したとも告げている。そして、この一件の消息を尋ねたところ「建アは御番を引かれた」らしく、その建部は、李冶説は虚誕と進言したようであるとも触れる。建部賢弘が御番を引かれたとする意味は、文面全体からして、『楽律全書』の「曆術、円法の事」の吟味を固辞したと言うことであり、代わって元圭が担当になる可能性を暗示していることになる。加えて、建部が『楽律全書』の全部を取り調べたかどうかは心許ないと非難し、その一方で、このような話題が持ち上がったとき、元圭のことを再び喧伝したが「只、取成し計申ては最眞の様に相聞へ候」とする配慮も見せるのである。このような懸念は、徂徠の幕閣に対する過剰な売り込みから生じる警戒感からであろうが、徂徠は「最眞」と思われるほどの売り込みをしていたのであろう。徂徠による工作の程度と真偽のほどは分からないが、両者の信頼のほどが窺える一節であろう。

そして三項からは、再び李冶の円周率を取り上げ、徂徠の李冶説に対する元圭と建部による批判への全面的な反論が展開される。これらのことは脚注13と14に示した論文を参照された。

さて、こうした議論から書簡(三)はつぎのように位置けることができよう。則ち、書簡(一)に続くものがこの書簡(三)である。享保11年に『測円海鏡』が舶載されていることを考慮すれば、書簡は享保11年12月15日に差し出されたものと判断することができる。では、『皇和通曆』の序

文の日付をどのように考えるのかと言う疑問が残る。このことは序文の完成が必ずしも日付通りでなかった、すなわち享保10年10月1日以後に元圭に渡されたと解釈すれば了解できることになる。そして、徂徠の序文付き改訂版『皇和通曆』は享保12年に刊行されたと見なせば納得できることになる。

(四)三月十五日付書簡

当春も新禧の預御玉諭候。又々/三月十五日落手致拝守候。愈御平安悦/入存候。愚拙無別条罷有候。乍去、陳年序候故/にて哉、度々相煩候。されとも精神等不相替候。御心安思召可被下候。

- 一 拙序、黄赤道之所交赤を白に御改被成度由、御尤/存候。黄赤道と申、連属の古来より有之候事に御座候。食字の事は易に日中、則晨月盈、則食と御座候。是月食の明文也。他人虧字晨字の如く見過る/事を御恐候事。是は不命の惣俸の文書にても/他人愚拙の通に見可申哉。其段無心元、先つ最/初孟子語より已下世上の見様とは格別の違/に候。仁斎派共別に而候。愚拙認候文は愚拙心一は/いの事に候間、少も曲何ぞ他人候事は無之儀と存候。左様思召可被下候。
- 一 皇和抜頭に可被成候由、是は思召次第に御座候。左候得て、上に明き有之候間、題も其通御尤に候。
- 一 円周率の事委細被仰下、めんどどうなる儀を扱々/忝存候。御書面弥々哉可仕候。
- 一 周礼内方一尺円其外と云文もやはり被仰下候。真数にても無妨存候。零数多文字の長くなるを/嫌候。算法にて認候と相見へ申事に候。李冶か周/髀算経を引合せたる斗杜撰と相見へ申候。尤、周礼の文斗にて算法は知れ不申候へ共、算法を/知りたる人の目よりは此文算法にて出たと申候/事明に可有之候。此段左様にて御座候哉。思召承/度存候。
- 一 十二律算、文理御合点参兼候由、愚拙委敷/写留置、追而かかせ候而可懸御目候。御慰に御覽/可被成候。管圍を廃する事、先年足下も御物語/候故、辻伯耆守²³に愚拙承合せ候所、彼男にはんなる/挨拶に候。耳は師曠には劣る哉と。此疑も有/之候。
- 一 字学律果の内、序文の事愚存候。御不審/とは違申候。天文の僉儀は不命に候。古来甲を²⁴逢/子を困敦²⁵と云例にて、逢困敦とかきたるまでの/事也。在折木の次と云は只正月と云事也。其子細は/十二辰十二次は元来日月之会次の名を付たる事にて/折木とさへ云へば寅宮の事なり。文例多御座候。嘗て木星の事を云たる物に非ず候。愚存如此。一日建歳建の事定而其名命名の故、此も少は可有/之候へ共、今日不可料度ことなれば不料度こと、愚拙は/同正に候。只。紀号にて如此合紋を付置ふ申候得ど、混乱雑術ゆへ付置たる事。是聖人の神智也。聖人の神智にて造玉へることにてゆへあることなりゆへなきことあり。悉くゆへあることと存候事、不知道の人/の見識也。愚拙も昔は悉故あるへきと存候を、十年/以来此見始朗也。此見不朗れば、聖人の道はいまだ/夢にて御座候。仁斎はゆへなきことは聖人の言に非ず、只/世の習しに従玉へる迄也と思ひ候。是仁斎が所以不/知道の御疑ひ成間敷候。但し曆は堯時奥候。是は文証有之候。当期後音候。恐言頓首

三月十五日

物部 茂卿

²³ 辻近寛(1668 - 1721)。江戸中期の雅楽家。享保5年、53歳で没。

²⁴ 十干の甲の異称に關逢(あつぼう)・關蓬(あつぼう)・焉逢(えんぼう)がある。

²⁵ 子年の異称。こんどんとも読む。

中根上右衛門様

「解説」

書簡(四)の冒頭は新年の挨拶に始まり、3月15日に「旧暦御返書」を落手したと言うが、返書の内容は具体的に示されていない。その文節にあつて徂徠は「年序候故にて哉、度々相煩候」と述べて、加齢による煩いがしばしば起きていると告白する。健康面の不安が生じているのであろう。その一方で、「精神等不相替候」と記し、精神面では健常であることを強調して、健康不安を払拭する姿も覗く。徂徠は書簡(三)で下痢に罹ったことを明らかにしていたが、その後遺症が影響していたのかも知れない。

続く一項では「拙序、黄赤道之所交赤を白に御改被成度由」と触れる。これは明らかに『皇和通曆』に寄せた徂徠の序文のことになる。序文の上木は始まっていた。このことは書簡(三)で、徂徠は別書の序文がよいとも指示していたから、版元に渡され原稿は校正の段階に入っていたのであろう。その内容を確認した元圭は、徂徠が「黄赤道之所交」(黄道と赤道の交わる場所)と記した箇所を「赤を白」(赤道と白道)にして欲しいと申し出た。だが徂徠は、もっとものことではあるが「黄赤道」のことは古くから使われているので問題はないと主張して、元圭の求めには応じなかった。

『皇和通曆』の徂徠の序文は、その前段で、近世日本の儒者は宋代の朱熹の文献を読むことはできても、唐宋以前の古典に精通することはない、しかし、元圭はそれら凡庸な儒者とは異なると称揚した上で、元圭の暦学者としての姿をつぎのように描いていた。

元圭又た巧思有り。嘗てその心より創めて、古渾儀を變す。機を設けて輪を旋らす。一旋一日、須臾して三百五十四旋、一歳の日躔月離、黄赤道の交わる所、弦晦盈食の状、日を按じて驗むべく、二十四節、鐘有りて自ずから鳴る。人嘖々驚異せずと云ふことなし。亦たその緒餘と云ふ。

瞭然と言うべきであろう。元圭が指摘した箇所は「日躔月離、黄赤道の交わる所、弦晦盈食の状」と記して、そのままになったのである。この事実は、徂徠の主張に妥協する元圭の姿が垣間見えることになる。また二項では「皇和抜頭に可被成候由」と質しているが、これは校正刷りを手にした徂徠が紙面の体裁について言及したものと思われる。事実、序文は書題の「皇和通曆序」の匡郭を一字分上部に突き出て上梓に及んでいるのである。

三項・四項は李冶の円周率問題を言及しているが、それ以前の書簡と較べて徂徠の論調が柔らかくなっている。「めんどろなる儀を扱々忝存候」あるいは「真数にても無妨存候。零数多文字の長くなるを嫌候」とする文面には、徂徠の精気が失われつつあるように見えてならない。では、この書簡はいつ頃のものであろうか。既に指摘する様に、この書簡が『皇和通曆』の序文のことなどから鑑みて書簡(三)に続くものであることは疑いを入れない。書簡(三)の日付は極月十五日であり、書簡(四)は三月十五日であった。然らばこれは書簡(三)の翌年とする判断ができることになる。則ち、享保12年3月15日の差し出しとなろう。そして、徂徠の序文を持つ『皇和通曆』もこの年に発刊されたと思われる。

§4. 小結

ここまで書簡(一)から(四)までの文面、特に『皇和通暦』と『荀子』の序文および『楽律全書』の円周率を巡る論争に焦点をあてて議論を進めてきたが、これらをまとめると徂徠と元圭の書簡交換はつぎのようであったと考えることができる。

- (1) 享保10年以前に両者は面識を得て、互いの書簡の交換は始まっていた²⁶。
- (2) 書簡(二)以前に、元圭は徂徠に対して『皇和通暦』の序文と『荀子』出版のための協力依頼の手紙を送った。その文面には『荀子』出版に掛かる費用は元圭が負担する旨書かれていた²⁷。そのような元圭の依頼に対する徂徠の返信が書簡(二)にあたろう。また、元圭は序文依頼後に、漢学に関する様々な質問と併せて序文の進捗状況を問い合わせる書簡を送っていた。
- (3) 書簡(二)では、『皇和通暦』と『荀子』の序文が進んでいると伝える一方で、『荀子』の校合は時間がないためできないので、校合本を返すと言う。そして、元圭は二、三年の内に出府するだろうとも言い、出府が建部代わりとばかり思し召し趣に聞こえてくると話す。(享保10年5月望日の差し出しであろうか)
- (4) 元圭は、徂徠の自宅が被災したことを知り(あるいは徂徠から避難先を知らせる手紙が届いたかも知れない)、火災見舞いの書状を徂徠に送付する。
- (5) 書簡(一)は(4)の元圭の書状に対する応答になる。ここにおいて徂徠は『楽律全書』の吟味に手間取り序文の執筆が遅滞していることを謝りながら、『楽律全書』の十二律と円法の概略を別紙にして送ると申し出た。(書簡は享保11年8月15日の差し出しであろう)
- (6) 元圭宛てに『楽律全書』の十二律と円法の概略を記した別紙が届く。この書簡には『皇和通暦』のための2通の序文が含まれていた可能性がある。
- (7) 元圭は『皇和通暦』の序文の執筆に謝意を表しながら、本書と別書の相違を書状にして質し、併せて別紙で知らされた『楽律全書』の円法に関する徂徠の李冶説を虚誕と非難する。
- (8) (7)の元圭の指摘に対して、徂徠が反応したものが書簡(三)である。(書簡は享保11年12月15日の差し出しであろう)
- (9) 書簡(三)に対する元圭の反応は不明であるが、『皇和通暦』に寄せられた徂徠の序文の「黄赤道之所」に関わる修正を求める書状を出す。その他暦注のことなどの質問にも及ぶ。
- (10) 書簡(四)は『皇和通暦』の序文の校正が進むなか、徂徠は元圭の要求を拒否する。その一方で序文の体裁などは元圭に委ねる。(書簡は享保12年3月15日の差し出しであろう)
- (11) 書簡(四)をもって、元圭は徂徠の序文を有する『皇和通暦』を刊行する。享保12年3月以降のことであろう。

蛇足ながら、

- (12) 享保12年4月22日、元圭は「十人扶持」を下賜される。元圭の「十人扶持」のことは『江

²⁶ 高橋博巳氏は、元圭の『筌蹄集』(元禄8年:1695)が刊行された頃、両者の認知があった可能性を指摘されている。詳しくは『江戸のバックロク 徂徠学の周辺』、ペリカン社、1997年、pp.154-162を参照されたい。

²⁷ 前掲『徂徠集』の「刻荀子跋」には「平安元圭、貲を捐し、荀[子]を刻す。予これを以てこれを嘉す」と述べているから、『荀子』の出版費用は元圭が負担する予定であったことが分かる。なお、『荀子』は延享2年6月、「京白山堂 中根保之丞法軸」、「平安書林 葛西市郎兵衛好延 梓行」として版行されるが、これに跋文を寄せた葛応禎は「向に中根元圭、実に始め荀子を刻すことを謀る。以て時に全本乏しく、而して荏苒果たさず」と誌して、元圭の存命中に刊行が及ばなかった理由の一斑を明らかにしている。

戸幕府日記』につぎのように載る²⁸。

銀座勘定役²⁹ 中根上右衛門

右者兼て天文算術之儀能仕候付、此度十人扶持被下之候、弥以、此以後建部賢弘エ承合、執行可仕候、弟子をも取立可申候、御当地エも折々被出、彦次郎エ猶文承心懸可申候、尤銀座勘定役離候儀ニテハ無之、只今迄之通可參勤候。右之趣、京都町奉行方ニテ申渡候様々に、今日之次飛脚に牧野佐渡守迄申遣之、尤御勘定奉行エも書付渡之。

ついで、

(13) 享保13年1月19日、徂徠没、63歳。この年の夏、元圭は『暦算全書』の訓点和訳のために江戸に召し出される。

上記(12)と(13)の事項は徂徠による売り込みが功を奏したのかも知れない。勿論、建部賢弘も深く関与していたであろう。

そして、本稿の小結として纏めれば、徂徠による4つの書簡は書簡(二)、書簡(一)、書簡(三)、書簡(四)の順序で読めば理解が可能になる、である。

なお、本稿では改訂版『皇和通暦』のことについて深入りしなかったが、改訂を必要とした背景の考察は後日を期す。

【謝辞】

本研究は京都大学数理解析研究所 RIMS 共同研究(公開型)の支援を得て行われたものである。また、日本音楽史の研究家である山寺美紀子氏には様々な助言を得た。加えて査読者の指摘は論旨の精確性を担保する上で貴重であった。文末ながら記して各位に深甚なる御礼を申し上げたい。

参考文献

- [1] 李治『測円海鏡』、至元19年(1282)刊、任継愈主編『中国科学技術典籍通彙』数学巻一、河南教育出版社、1993年。
- [2] 朱世傑『算学啓蒙』、大徳3年(1299)刊、任継愈主編『中国科学技術典籍通彙』数学巻一、河南教育出版社、1993年。
- [3] 朱載堉『楽律全書』、万暦35年(1607)刊、国立公文書館内閣文庫蔵請求番号：経065-0001.
- [4] 建部賢弘『算学啓蒙諺解大成』、元禄3年(1690)刊、東北大学付属図書館林文庫蔵請求記号：林集書1165.
- [5] 中根元圭『律原發揮』、元禄5年(1692)刊、東北大学付属図書館藤原文庫蔵請求記号：3404.
- [6] 中根元圭『皇和通暦』、正徳4年(1714)刊、早稲田大学図書館古典籍総合データベース蔵請求記号：ニ05_01494.

²⁸ 国立公文書館内閣文庫蔵請求番号：257-0018.

²⁹ 中根元圭の京都銀座勘定役の就任は正徳元年(1711)のことになる。

- [7] 中根元圭「累約術」、享保 13 年(1728)、個人蔵。
- [8] 松永良弼「方円算経」、元文 4 年(1739)、東北大学付属図書館岡本文庫蔵請求記号：岡本写 72.
- [9] 唐楊勛註『荀子』、葛西市郎兵衛刊、延享 2 年(1745)、国立国会図書館蔵請求記号：本別 2-2.
- [10] 中根元圭述、源元寛訂『三正俗解』、明和 6 年(1769)跋、東北大学付属図書館岡本文庫蔵請求記号：岡本刊 72.
- [11] 物茂卿著『徂徠集』、享保 20 年刊(1735)、早稲田大学図書館古典籍総合データベース蔵請求記号：イ 17_00725_0001.
- [12] 藤澤東咳『東咳文稿』、関西大学図書館泊園文庫蔵請求記号：LH2*甲**10.
- [13] 『新訂増補国史大系 徳川実紀』第八篇、吉川弘文館、平成 3 年。
- [14] 上野謙爾『円周率が歩んだ道』、岩波現代全書、2013 年。
- [15] 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』、関西大学東西学術研究所、1967 年。
- [16] 大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』、同朋舎出版、1984 年。
- [17] 川原秀城、池田末利編『荻生徂徠全集』第一巻学問論集、みすず書房、1987 年。
- [18] 小林龍彦「建部賢弘と中根元圭」、『数学文化』No.22、2014 年。
- [19] 小林龍彦「三人の徳川将軍に仕えた暦算家建部賢弘」、『和算研究所紀要』No.15、2015 年。
- [20] 小林龍彦「中根元圭と禁書令の緩和」、『和算研究所紀要』No.16、2018 年。
- [21] 小林龍彦「朱載堉の円周率と荻生徂徠」、武内恵美子編『近世日本の楽と諸相』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告 12、2019 年。
- [22] 高橋博巳『江戸のバロック 徂徠学の周辺』、ぺりかん社、1997 年。
- [23] 平石直昭『荻生徂徠年譜考』、平凡社、1984 年。
- [24] 平山諦『円周率の歴史』、大阪教育図書、1980 年。
- [25] 山寺美紀子「藤澤東咳と七絃の琴-その琴系及び弾琴、琴学、琴事の実像について」、『関西大学東西学術研究所紀要』、第 49 輯、2016 年。
- [26] 山寺美紀子「荻生徂徠の音楽に関する新出資料五点とその意義について：享保五年に有馬兵庫頭の問いに答えた書、「三五要略考」及び音楽に関する覚書、琴（七絃琴）に関する文書、吉水院旧蔵楽書に関する文書、中根元圭に宛てた書簡」、『関西大学東西学術研究所紀要』、第 51 巻、2018 年。